

林業技術センター
普及班便り
(第10回目)

あなたの山づくりに

応援する林業普及

【いわての林業経営者 その1】

一 はじめに

平成20年度の普及班便りでは、県内の林業経営者の経営事例について紹介していきたいと思えます。

今回は、主業的林業経営者である岩手郡岩手町の山中義一さんをご紹介します。

二 人物紹介

【プロフィール】

山中義一さんは岩手町生まれ。東京の大学を卒業後、家業のシイタケ生産・自家山林の素材生産に従事、その後素材生産業の「山中林業」を設立し代表を務められています。

町内若手篤林家4名で地域林業を勉強する「岩手緑創会」を設立し、会長を務められた後、県林業研究グループ連絡協議会長、県青年林業士などを経て、現在は県指導林家として活躍されています。

三 経営の概況と特徴

(1) 貴重な天然御堂松

山中さんの山林はアカマツが主で、

広葉樹との混交の天然林・人工林合わせて約300ha、スギ・カラマツが約100ha、天然広葉樹林が約130haで構成され、合わせて約530haを所有する大規模所有者です。

所有山林には、最近地域では目にするのがなくなっている胸高直径60cmを超える貴重な天然の御堂松が存在しています。

なお、御堂松は全国的に名の知られている南部赤松の一つであります。



天然の御堂松

(2) 優良大径材のストックを次代へ

氏が代表を務める山中林業は平成8年に設立され、年間約6,000㎡のカラマツや広葉樹の製材用材とパルプ・チップ用材を主とした素材生産を行っています。

氏が素材生産業を営みながら、改めて消費者の視点で自らの山林を眺めたところ、材質において不十分なものがまだまだ多いことを感じられたそうです。



山中氏の所有山林

商売として製材所や工務店が望むものを供給するためには、①100年以上の優良大径材、②用途に合わせた多様な樹種、③ニーズに合わせたボリュウムが必要であるとの思いから、自らの山林について100年先を見据えた間伐等適正な森林整備を実施し、長伐期施業により自分の代では伐らない「備蓄林」と、50年

伐期で回転させる「経済林」を明確に分けて管理されています。

(3) 人とのつながりを大切に

氏が長伐期施業を進める上で最も懸念されていることは、相続問題であり、地域内外でも相続のために山を伐る所有者が多いことです。せっかく年数をかけて育ててきた立木が市場の求めるサイズになる前に伐られ、パルプ・チップ用材として販売されている残念な事例をよく目にします。

このため、地域全体のアカマツや広葉樹特殊材の備蓄量を増やしたいとの考えから、若手林研グループ「岩手緑創会」の活動を通じて会員の山林に観察林分を設置し、針・広混交林や広葉樹の植樹・保育等の技術研修会を開催するほか、先進地視察等に参加するなど自己研鑽に務めておられます。

四 おわりに

普及班便りでは、これからも随時県内の林業経営事例の紹介を行っていき予定ですので、皆様の地域で取り上げてほしい方がありましたらご連絡ください。

林業技術センター普及班